

機関投資家とサステナブルファイナンス

氏名 石塚久晃

指導教員 武田寛

要旨

本研究の目的は、年金制度のサステナビリティを考える上で、GPIF や年金基金をはじめとする機関投資家の役割とサステナブルファイナンス現状について明らかにすることである。特に、本研究では、日本の機関投資家の中で最も影響力のある GPIF の分析を行い、以下のことがわかった。

- (1) GPIFの基本ポートフォリオの変遷を見ると、基本ポートフォリオは、債券から株式へ、また、国内投資から外国投資へ変化している。つまり、安全な運用からリスクを取り利益を目指すポートフォリオへと変遷している。
- (2) GPIF の保有銘柄を見ると、国内株式は TOPIX の上位構成比率銘柄とほぼ同じであり、国内株式の政策ベンチマーク TOPIX との超過収益率は+0.13%である。外国株式は MSCI ACWI 構成銘柄上位 10 社や S&P500 の組入れ上位 10 銘柄とほぼ同じであるが、外国株式の政策ベンチマーク MSCI ACWI との超過収益率は-0.9%である。
- (3) GPIFの『2021年度ESG活動報告』によると、GPIFのESG投資における取組みについて、PRIによる評価（戦略とガバナンス）は、A+であり、RAAI（Responsible Asset Allocators Initiative）の責任投資をリードしていく投資家ランキングは、Leadersと外部から高く評価されている。
- (4) GPIFのスチュワードシップ活動において、GPIFの運用受託機関が重大と考えるESG課題のひとつとして情報開示がある。この点に関しては、IFRS財団により設立された国際サステナビリティ基準審議会（ISSB）によるESG情報開示基準の国際的な統一基準策定により、企業側の情報開示は効率化され、情報開示の比較可能性が高まり、ESG情報が企業価値や資産価値に反映されることが期待される。